

日本語コミュニケーション力を高める授業構築を目指して ―日本人学生と留学生が混在するクラスでのグループ活動の視点より―

A Way to Activate a Japanese Communication Class in University
—Cooperation in Group Activities—

長谷川 和則
Kazunori HASEGAWA

(平成18年9月13日受理)

要旨

大学設置基準大綱化以降のカリキュラム改革により多くの大学においては日本語表現法等の科目を設け、大学生の日本語によるコミュニケーション力を育成しようとしている。そこではレポート作成や討論、発表の仕方等の教育が行われているが、教材や授業方法は未整備のままであり、どういったカリキュラムにより目標に到達させるかは大きな課題である。本論では2006年度前期に静岡産業大学情報学部で開講した「コミュニケーション基礎」での諸活動への学生の取り組みを、教師の毎授業中と授業後のメモ（授業ポートフォリオ）、諸活動を行ってみたいの学生の感想文、そして最後の授業でのアンケート分析結果を検証しつつ考察することで、どのような教材を用いて諸活動をいかに展開することが、留学生が6割を超えるクラスで、日本語による対人コミュニケーション力の基礎を培うのかを明らかにしている。考察・検証された中で最も大切な点は、グループ内での日本人学生と留学生の促進的な相互交流が活発なコミュニケーションを生み出すことである。よって、互恵的な相互依存関係のもとに促進的相互交流をグループ内で図れるように諸活動を仕組み、提供することが学生達の日本語コミュニケーション力の育成に繋がると結んでいる。

1. はじめに―現代日本におけるコミュニケーション状況と教育の概観―

現代の日本における対人コミュニケーションを取り巻く環境は、情報機器の発達と社会の様々な活動場面への浸透が進む中で、大きく変化してきている。その変化の中で様々な人間関係の歪みが浮かび上がっている。例えば、家庭では親子間のコミュニケーションが不活発であり、意思疎通がうまくいかないことに起因する不和から引きもこり状態の子供が多数生じていることがマスメディア等で報道されている。地域での教育力も低下の一途を辿りつつあり、隣人の顔を見かけることはあっても声を掛け合うことはなく、コミュニケーション不足から互いに孤立化を深めつつある。学校においても点数至上主義が支配し、特に中学と高校においては進学のために1点を争って生徒同士が競争し、互いを蹴落とすことに躍起になっている。そのために生徒同士は表面的なつながりを持つものの、より深い所での人間的な絆を持つには至っていない。これらの学校では先生は生徒管理に目を走

らせることに時間を取ることが多い。いわゆる生徒指導の名の下に、管理教育が徹底して行われることに起因し、先生と生徒との間の対人コミュニケーションは危機的状況に陥っている。

一方、こういった現代社会を生きる人々を取り巻くコミュニケーション環境を改善し、人間同士の深いつながりを持ったコミュニティーを創造しようとする試みは、様々な形で目につくようになってきた。例えば、高齢者が持つ人と深く関わり合いながら生きる知恵を社会に還元しようとする動きがあり、地域コミュニティーの中に彼らとのつながりを持つ場を作り、子育てに活かしてもらうなどの取り組みがなされている。学校教育においても、現行の小学校、中学校そして高等学校の学習指導要領「国語」においては「伝え合う力をたかめる」ことを目標の中に掲げ、また、中学校と高等学校の学習指導要領「外国語（英語）」では「実践的コミュニケーション能力」の育成を目標とした教育が行われている。

大学においては、東海高等教育研究所（1997）によれば1979～1982年の共通一次試験の導入以後学生が大学で学ぶうえでの（伝統的）コミュニケーション能力の低下が顕著になり、1991年6月の大学設置基準大綱化以降のカリキュラム改革では教養ゼミナールや日本語表現法等の科目を設置し、それに対応する大学が増えた。また、奈良雅之他（1998, p.142）によると「教養ゼミ等」は彼らが調査した581大学の41.1%にあたる239校で開講されている。ここでは、主としてレポート作成法、討論法そして発表の仕方の3分野の教育がなされているという。しかし、これらをどういった教材により、どのように展開して教えるかは未整備のままであり、目標に到達するためのカリキュラムの作成が課題であることを指摘している。

学会においても、現代日本のコミュニケーション状況を分析し、コミュニケーション教育においてどういう方策をとる必要があるかが取り扱われている。例えば、2006年度の日本コミュニケーション学会全国大会（6月18日）では「日本におけるコミュニケーション教育の可能性を探る」と題したセッションが行われた。ここでは 桜美林大学が1989年に開始した「口語表現法」の成果と課題が発表され、また、「日本におけるコミュニケーション教育の可能性を考える」と題したシンポジウムでは日米それぞれ2名ずつの大学教員が参加し、コミュニケーション能力とは何か、何をもちてコミュニケーション能力の有無を決めるのか、今後日本人に求められるコミュニケーション能力とはどういったものなのか、が討議されている。

2. 「コミュニケーション基礎」開講背景、講義目標及び本論のねらい

2005年度学部改組を行った静岡産業大学情報学部国際情報学科の教育目標には現代社会において求められる対人コミュニケーション力の育成があるが、改組した年度の1年次生がその基底を形成すべき科目はカリキュラムにはなかった。更に、本学科にはコミュニケーションコースがあり、コース所属学生は基礎的な日本語コミュニケーション力を1年次のそれ相当の科目の中で養うべきであると考えた。このような背景のもとに、次のねらいを掲げて2006年度に「コミュニケーション基礎」を1年次の国際情報学科専門科目（選択、2単位）として設置した。

履修者が以下に述べる言語活動を通して日本語による対人コミュニケーションの基礎

力を養うことを目指す。口頭コミュニケーション力は、語るべき自己を発見しそれを伝えあう自己紹介ゲームに始まり、指定された状況・場面に合う対話を作成し発表しあうロールプレイ等の活動により養う。書いて伝え合うコミュニケーション力の育成のためには、視聴したビデオ等の内容をメモによりまとめ相互に伝え合う活動や、指定されたトピックへの意見を書き相手に伝え、相手はその意見に賛成または反対の立場で自分の意見を書いてまとめる活動等を行う。(『2006年情報学部シラバス』の本科目の「講義の目標とテーマ」より)

さて、ここでコミュニケーションという言葉の定義について筆者の考えているところを整理しておく。群馬県多野郡吉井町にある吉井町立中央中学校は平成15年度と16年度に学力向上フロンティアスクールとして文部科学省の指定を受けて「確かな学力を身に付ける指導の工夫～一人一人に応じた指導を通して～」をテーマに様々な活動に取り組んだ。その一つがピア・サポート活動である。報告書より一部を引用する。

「人々は遠い昔から互いに支えあい、助け合いながら生活を営んできた歴史をもっているが、社会生活の変化により人と人との関わりあいを経験する機会の減少などにより、自然には育たなくなった対人関係能力や自己表現力などの「社会性」を意識的、計画的に提供し、子ども同士の関わり合いを通して子ども自らが発達することのできる「学校づくり」をめざすことが必要である。」(「学力向上フロンティア事業を支える活動」より)

ここで述べられている「対人関係能力や自己表現力などの「社会性」こそがコミュニケーション力そのものである。また、松本(1999, p.13)ではコミュニケーションを次のように定義している。

コミュニケーション： 言語あるいは非言語によるメッセージの交換を通して、お互い意味を創出し、伝え合うこと。社会との結びつきを作り、保つ行為。

そして、現代社会においては子供たちは自分の住む地域社会との関わりが希薄であることを考え合わせ、社会との結びつきを視野に入れたコミュニケーションの定義が重要であることを述べている。吉井町立中央中学校での「社会性」を育ませるためのピア活動の試みは、まさしく現代に生きるためのコミュニケーション力を育成するものであることが分かる。松本(1999, p.15)では更に、コミュニケーション能力をコミュニケーション学での知見を踏まえて次の3つの要素に分けて示している。

Knowledge/Analysis (The Cognitive Domain)―知識

Communication Motivation/Sensitivity (The Affective Domain)―態度・意欲・関心

Skills (The Psychomotor Domain)―表現

単にある場面での適切な日本語表現を学ばせる知識習得型の学習をさせているだけでは、

コミュニケーション能力は育たないのである。その知識を学ぶ強い意欲があり、学んだ知識を活かして表現のできる場が提供されてこそ、つまり松本（1999）の言う3つの要素が相まってこそコミュニケーション能力は育成されていく。そう考えると、これらの3要素をどのように授業場面において学生に提供していけばよいのかは、日本語コミュニケーション力を育成しようとする本授業において非常に重要なことになる。コミュニケーション力を育成しようとする授業において教師が行うべきことを松本（1999、p.17）は次のようにまとめている。

要するに集団で効率的に学習させることに教員が躍起になるのではなく、教師は生徒同士が関わり合う仕掛けを用意し、その中で生徒が何を体験し、何に気づき、生徒たちにどのような内面の変化や知的興味・関心が生じたかを観察・記録し、生徒とそれを分かち合い、そして、親・同僚・管理職に報告し、話し合うことが求められているのではないのでしょうか。

本科目では先に示した「講義の目標とテーマ」に加えて、ここで述べたコミュニケーション及びコミュニケーション能力についての考察に基づき、第1講義においてエリザベス・キャリスター他（1994）により、「自分自身を知り、あるがままに受け入れ、自分を大切にできる（self-esteem）」、ことと「攻撃的でない表現で、他人の権利を侵さずに、自分の言いたいことを表現できる（assertiveness）」ようになることの2点を、講義終了時の各履修者の目標とするよう話した。よって、本科目では様々なコミュニケーション活動をペアやグループで行うことにより日本語でのコミュニケーション技術を習得するのみならず、相手を知りまた大切な自分に気づきつつ仲間作りを行い、互恵的相互交流の促進により自分に自信を付け、より高い次元での自己実現を目指すことが全履修者の目標となる。

本論では2006年度の「コミュニケーション基礎」おいて行った主たる活動の展開と学生の取り組みを、教師の毎授業中と授業後のメモ（授業ポートフォリオ）、活動に対して学生が書いた感想文、そして最後の授業で行ったアンケートの結果を通して詳しく分析・考察することで、先に述べた目標が到達されているのかを検証する。そして、どのような活動をいかに展開することが、留学生が6割を超えるクラスの授業で、日本語による対人コミュニケーション力の基礎を培うのかを明らかにする。

3. 実践—コミュニケーション基礎2006

3.1 履修者について

26名の履修登録者のうち2名は途中放棄したため、本科目を最後まで履修した学生は24名であった。その内訳は次の通りである。

【コミュニケーション基礎2006年度履修者24名の内訳】

- ・日本人学生9名／留学生15名
- ・男子11名（日5／留6）／女子13名（日4／留9）

- ・コース別人数
コミュニケーション：12名
観光：4名
公共マネジメント：8名

内訳を見ると留学生が全体の63%を占めていることが分かる。男女別では女子が2名多い(男46%/女54%)。また、コース別では、コミュニケーションが50%、公共マネジメントが33%、観光が17%となる。

3.2 9種のコミュニケーション活動を振り返る

ここでは9種の活動を実施した順に振り返り、何をどう行ったか、学生はどう取り組んだか、何が得られたのか、問題点は何かを考察していく。

1) 名刺交換会(4月21日実施)

自己紹介を互いに行うために次の要領にて名刺を作成させ、それを10枚程度持参させて制限した時間内で自分をクラスの他の学生に紹介して回るというコミュニケーション活動を行った。

<名刺作成要領>

●表側

- ・中央には、自分の氏名及びどう呼ばれたいかを書く。その右側には自分の顔のイラストを描くか、顔写真を貼付ける。
- ・右上には、自分を色に例えると何色かを書く。その理由を考えておく。
- ・右下には、自分が今興味を持って取り組んでいることを書く。
- ・左上には 自分の出身地を書く。
- ・左下には、自分を動物に例えると何かを書く。その理由を考えておく。

●裏側

自分の好きな言葉を書く。なぜその言葉が好きなのかを説明できるようにしておく。

この活動は第2回目の授業で行った。大学に入って名前と顔の一致しない者同士が、お互いに名刺に書かれた情報を交換する中で、知り合いになっていくことを狙っている。特に留学生が日本人学生と話をするのには、それ相当の準備があった方が良くも考えて、この方法をとった。時間を30分と制限して行ったが、全員が夢中になって取り組んでいる様は壮観であった。自己紹介でもらった名刺を全てA4のレポート用紙に貼付け、名刺交換会の感想を書き、次時の授業で提出させた。感想はいずれもプラスのものであり、その主な内容は以下の通りであった。

- ・交流の良い機会となった。
- ・自分から話しかけていこうという気になった。
- ・自分改革みたいだった。
- ・友達ができた。
- ・緊張したが、楽しかった。

- ・短い時間で多くの学生とコミュニケーションがとれた。
- ・コミュニケーションを体験を通して理解した。

日本人学生にとっては留学生と話すことに積極的姿勢を取るきっかけとなっていたし、また、留学生にとっても同じようであった。このように科目履修者同士が相互に親密になろうとする意識を名刺交換会を通して持つことができたことが、この後の諸活動を行ううえで学生相互の積極的な取り組みを可能にしていくことにつながった。以下に日本人学生と留学生の感想文を一つずつ掲載する。

日本人学生の感想：

最初は、知らない人に話しかけて名刺を交換するなんてなんか恥ずかしいから、ちゃんとできるかどうか不安だった。自分の作った名刺を出すのは恥ずかしかったけど、「すごいね」とか言ってくれる人がいてうれしかった。普通の授業だと他の人と話す機会なんてまったくといっていいほどないので、いろいろな人と、特に留学生と話ができたのはうれしかった。みんな上手に名刺を作ってあって、趣味について話をしてもりあがったり、相手のことをいろいろと知ることができた。今まで、留学生に話しかけたりするのは「話しかけにくい」とか「会話が噛み合なかったらどうしよう」とか考えていたからできなかったけど、話しかけてみるととても話しやすかったし、とても楽しかった。

留学生（中国人）の感想：

皆は自分の名刺を持っていて、教室を歩いてきた。よろしくお願ひします、と言ひながら名刺を交換しました。相手の笑顔を見た時、私は緊張しませんでした。皆が優しいと思っています。名刺を通じてクラスの皆さんは人々の基本情報を知っています。今度の名刺交換会私たちの深い交流の良ひ基礎を置きました。そして、以後話すとき、共同の話題が多くなります。今度の交換会はとても楽しいでした。(原文のまま)

2) 他者紹介（4月21日と28日に実施）

名刺交換会時に「特に印象に残った人を1名クラスの皆さんに紹介してもらひますので、どこが印象的なのかを具体的に紹介できるよう、その人の名刺にメモを取るようになさい」と指示を出しておいた。学生はこれにより紹介する相手を決定し、どう紹介するかのメモを作る。そのメモを参考にして他者紹介を行つた。学生はその場で立って決めた相手を紹介するのであるが、その際に紹介される側も名前が言われたら立つようにした。「教室の大きさを考え声量を調整し、聞ひている皆とのアイコンタクトを保ちながら紹介なさい」が話す側への指導事項である。聞ひている側も「話し手の方に視線を送りながら聞ひく」ように注意させた。また、一つの紹介が終わつたら、クラスの皆が大きな拍手をし学生の頑張りを賞賛するようにした。

3) 私の名前の意味（を伝える）（4月28日実施）

「自分の名前（姓ではなく）の意味を説明できるように準備なさい。誰がつけたかも調べておくこと」という課題を前時に出しておいて実施した。日本人の特に女子学生の取り組みは良かったが、留学生の事前準備は今ひとつであった。彼らには何を課題としてい

るのかを、具体例を挙げて分かりやすく明確に提示する必要があると思われる。この活動は次の2段階での実施とした。

<展開>

第1段階（ペア）：相互に自分の名前の意味を口頭で伝え合いなさい。ジャンケンで勝った方から始めなさい。分かったことを次のボックスにメモしなさい。

第2段階（グループ）：4人1組となりペアの相手の名前の意味を、相手方のペアに伝えなさい。ペアの代表がジャンケンし、勝った者から始めなさい。

4) 日本一長い名前（寿限無）（4月28日と5月12日に実施）

自己紹介ら始まり名前にポイントを当てた活動が続けてきたが、その最後に落語の「寿限無」の中でのあの長い名前（「寿限無寿限無、五劫の擦り切れ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝る所に住む所、藪ら柑子のぶら柑子、パイポパイポ、パイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助」）を扱うことにした。ねらいは、口頭で言葉を発する際の呼吸を意識することと、寿限無が面白く伝わるように抑揚、強弱を自分で考えて口頭表現することにある。呼吸は例えば「おはよう」という挨拶を交わすのであれば、それを発声するためのほんのわずかな呼吸でよいが、寿限無のような長い文を2呼吸で言うとなると、かなりの量の息を吸い込む必要がある。つまりどれだけの長さの言葉をひと呼吸で発声するのかと、どれだけの息を吸うのかの関係していることを理解すると共に、それを自分のものとして習得していこうということである。

2呼吸までしてよいことを告げた後の音読練習では、呼吸する箇所を意識しながら座ったままで3回読ませた後、立って音読し、さらに、歩きながらの音読を行った。声の抑揚、強弱を意識するには、テンポよく歩きながらの音読は効果的である。次に、学生を座席に戻した後、列毎に読点の所までを一人が読み、次の人へと続ける輪音読を行った。最後にプリントを見ずに、教師の後から、読点で切りながらの繰り返し読みをした。これでだいたい頭に入った。しかし、留学生に取ってはどこがおもしろいのかの理解が今ひとつであったようだ。日本人学生と留学生（いずれも女子）一人ずつに、プリントを見ても良いことにして発表してもらったところ、日本人学生は2呼吸で声の抑揚、強弱を使い分け面白みを出して言えたが、留学生はそこまでは至らずであった。しかし、発表した留学生の日本語は大変に明確な音声表現ではあった。

この活動の締めくくりとして、また落語としての面白みの理解のために「寿限無」を『にほんごであそぼ じゅげむ』のCDを使って聴いた。子供が演じる「寿限無」であったことが幸いしてか、また分かりやすいテンポで語られていることもあってか、留学生にも笑いが起こっていたのが印象的であった。

5) ロールプレイ（対話を演じる）（5月19日及び26日実施）

短い対話を材料とし、グループで話し手の気持ちが表出されるよう状況の中での表現分析をした後、その気持ちをト書きにまとめ、役割演習を行った。テキストの選択にあたっては、日常の場面状況で留学生でも遭遇していそうなものであること、また、日本語表現の解説が付いていることを念頭に選んだ。

<展開>

- (1) テキストを読む (NHKテレビ 日本語講座 『新にほんごでくらそう4・5』 pp. 116-117)

【個人】右側の対話と解説を読みなさい。できるだけ早く読み内容をつかみなさい。

対話文 (パート先で)

同僚：じゃあ時間だからお先に。お先に失礼しまーす。

店長：おつかれ！

アンナ：あ、佐藤さん。あの、これ。

同僚：なあに？

アンナ：ええ、連休にちょっと遊びに行ったので。お土産です。

同僚：あら、ありがとう。開けていい？わあ、かわいい！

アンナ：気に入ってもらえればうれしいです。

同僚：うん、ありがとう。

- (2) 対話を読む

【個人】BGMを聞きながら、対話を読みなさい。同時に、同僚とアンナがどのような気持ちで台詞を言っているかを考えなさい。

- (3) ト書きを書く

【個人】同僚とアンナがどのような気持ちで台詞を言っているかを考え、空いている所にト書きとして書き入れなさい。

*以下はグループ(3人1組)による活動です。

- (4) ト書きをまとめる

相互にト書きを読み合い、その内容が状況に合った適切なものかどうかを話し合いながら、一つのト書きにまとめなさい。まとめたト書きは赤字で書きなさい。

- (5) 声優になったつもりで練習

役割を決め、ト書きに表された気持ちが伝わるように、声優になったつもりで対話を読みなさい。

*元の対話では女性同士(同僚とアンナ)が話しています。グループにより男性同士または女性と男性が対話する場合は、言葉遣いをそれに合うように調整してください。

- (6) 対話文を見ないで練習

テキストの対話文は中折にして見ないようにし、動作も加えて練習しなさい。必ず立って行うこと。

- (7) 発表と評価

グループ毎に、成果を発表してもらいます。評価の観点は次の4つです。クラスの仲間が評価者となります。

【評価の観点】

- ・声の大きさ
- ・明確さ(はっきりとした日本語)
- ・気持ちの表現(登場人物の気持ちが伝わる)
- ・テンポ(対話展開の流れ)

【評価の方法】

- ・上記の4つの観点を全て満たしていると判断—右手の指4本を出す。

- ・半分は満たしていると判断―右手の指2本を出す。
- ・まだまだ修行不足と判断―右手の指1本を出す。

各グループには日本人学生が一人入るようにした。彼らは言わばグループのまとめ役としてト書きをまとめたり、活動の指示を留学生に伝えたりした。グループを作る際に欠席していた学生を除くと、21名であり、日本人学生1人と留学生2人のグループが7つできた。授業開始から1ヶ月が過ぎクラスの雰囲気も和らいだものとなり、この辺りから日本人学生が留学生をサポートしながら活動を展開する形ができてきた。

ト書きをまとめる段では、自身の日本語力がさほどではない日本人男子学生たちも留学生の話に熱心に聞き、まとめ役を買って出ている。彼らのこの授業への活発な参加態度は、自分の日本語の方が留学生のそれよりも勝っているという自負に負うところが大きかったと思う。そして事実その通りであった。日本人学生たちが指導的な立場に自分を置きながら活動をリードすることで、自分への自信がついてきたと考えられる。また、留学生も彼らと話し合いをする中で、多くの日本語表現を意味のある状況にて習得していったものと考えられる。

5月26日実施の発表は、前時欠席した学生によるグループ（日本人2名と留学生1名）も加え、8つのグループで行われた。プレゼントを渡す際にもそれに見合った何かを小道具として利用し、動作も加えられたプレゼンテーションは予想を遥かに超えるできであった。教室の後ろが特設の舞台となり、そこで同じ対話を用いたロールプレイが演じられたのであるが、どれ一つとして同じものはなかった。つまり、一つずつがオリジナリティーに溢れていたのがであった。対話中の人物を演じる学生の大げさな動作や表情に笑いが自然と起き、終われば拍手喝采の嵐に包まれたのがであった。この活動にてクラスの一体感が強まったことは事実であった。この辺りが読み取れる学生の感想文を以下に記す。

【学生の感想】

日本人学生：

- 最初は難しいと思ったけど、やってみると意外にみんな気持ちもこもっているし、みんなうまくて、自分はとても恥ずかしかった。自分はあまりうまくいかなかったので、次は文1つ1つの意味や気持ちをよく考えて、もっと練習して完成度の高いものにしたいです。それにこういう授業をやってもらえると外国人との交流もできるし、人に慣れられてうまくしゃべれるようになってきたので、これからも頑張りたい。(男子)
- 今回授業でロールプレイをやったがいろいろと楽しめたと思う。学校に入学して間もないのであまり知人も多くなく、授業を通して同じ授業を受けている人との会話やコミュニケーションがとれたのがとてもよかった。特に留学生とはあまり話したり関わりを持ったことがなかったので、たくさんの会話やコミュニケーションがとれてよかった。まだ慣れていないせいか、日本語での発音がおかしかったり、言葉の意味が分からなくて困っていたら、積極的に教えてあげたいと思う。このロールプレイをやって人とのコミュニケーションの大切さなどが分かった。(男子)
- 私のグループはAさんとBさんでした。彼女たちはとても明るく、ト書きの時は一生懸命どういう意味なのか聞いてきたりしてくれ、とても充実した話し合いができたように思います。また、練習をするときBさんが「楽しくなるように」と、身振り手振りの動作以

外にも顔の表情を加えたりして、分かりやすく伝わるように練習を行うことができました。実際の発表ではどのグループもとても楽しく、そして気持ちがこもっていてよくできていました。全ての班が真剣にやっていたので、自分のグループがやるとなった時、とても真剣な気持ちになりました。発表は少し照れてしまいましたが、AさんもBさんも優しく和ましてくれたのでうれしかったです。(女子)

●留学生と話す機会があまりないので、いつも話さない人とたくさん話すことができて楽しかった。留学生と「ここはこんな感じでやったらいいんじゃないか」とか話し合い、お互いの意見を出し合うことができたのがいい経験になったと思う。留学生の日本語の発音とかはまだ聞き取りにくいところがあるけど、一生懸命練習していたし、演技においては日本人よりも表現の仕方が上手だったと思った。(女子)

留学生：

●グループによって現れた気持ちが違うと思います。クラスメートの演技は初めて見て驚きました。すばらしいと思います。特に、留学生と日本の学生の共演はとても上手だと思いました。留学生の私が日本人の友達を作るのは難しいことなのですが、この授業を勉強したら考え方が変わりました。授業での何回かの交流の中で日本人クラスメートの優しさと親切さを感じました。(女子)

●本時のロールプレイは楽しかった。初めて日本の学生と一緒に練習し、発表しました。男性と女性の言葉の違いや人物の心理など細かいことも勉強しました。例えば、会話の中で「じゃあ時間だからお先に。お先に失礼しまーす。」がある。普通の意味は、自分が仕事を終わったら残っている人に対して先に帰る人がいう挨拶の表現。もう一つは一日の仕事を終えたうれしい気持ちも持っています。コミュニケーションの一つの要素は相手の心理を分かって話すことです。顔の表情と動作も無視してはならない。相手の気持ちを考えて自分の言いたいことを正しく言います。(女子)

●私のグループはたまたま先週の講義に出席しなかった学生たちである。役割を決め、ト書きを書くことが他のグループより遅れた。よく話し合った結果、私は店長で、Aさん(日本人)はアンナで、Bくん(日本人)は同僚の役割を演じることを決めた。ト書きも素早く完成した。次に私たちははじめに練習を始めた。私は外国人で店長の役目をしたことがないので、どうすれば店長らしく演じられるかを彼らに尋ねた。「店長だから偉そうにした方がいい」と親切に教えてくれた。数回練習した後で私は「アンナさんは恥ずかしそうに同僚にプレゼントをあげるのだから、もう少し恥ずかしそうに、ゆっくり話した方がいい」という意見を出した。自分のグループがうまく演じられるために厳しい注文をつけたので、「厳しい監督」と言われた。

●順番に発表するため、私たちのグループが最後なので、待たなければならなかった。緊張して待つと共に、他のグループの長所と短所を見つけていた。声の大きさや明確さやテンポなどが、みんなそれぞれ違うので、本当におもしろかった。特に動作も加えて発表するので、よけいに人を笑わせていた。楽しい時間はいつも早くたってしまう。ロールプレイをまだまだやっていたいけど、講義の時間に限りがある。話し合っ、笑っている間に、みんなだんだん仲良くなるのではないのでしょうか。(女子)

6) 議論する4人組(「大学生はアルバイトをするべき」)(5月26日実施)

<展開>

- (1) 4人1組のグループを作り、下の課題を全員で読みなさい。
課題:「大学生はアルバイトをするべきである」
人物:反対の親、賛成の教師、反対の学生、賛成の社会人
- (2) 次に、誰がどの人物になるかをジャンケンして勝った者から決めなさい。
- (3) 指定された人物の立場から課題を考えて意見をまとめ、用紙の裏に書き出しなさい。
時間は5分間です。
- (4) 口頭発表練習:与えられた役割で口頭発表をするための練習をなさい。
3分間です。
- (5) グループ別発表と評価

この活動もロールプレイの一つとして実施したものである。最初は、上記の課題ともう一つ「東京から超大型店が藤枝に進出してくることになった」(人物:市民、商店の店主、警察官、市長)とのどちらかをグループが選んで実施することにした。活動を初めてみると、「大学生はアルバイトをするべきである」を全グループが選択していたので、こちらで行うことにした。自分は大学生がアルバイトをすることに賛成であっても反対の意見を考えてまとめることで、ものの見方を広げていくことをねらった。また、先に行った出来上がっているシナリオをもとに演じるのとは異なり、シナリオ作りから学生が取り組むことが特徴である。次のような感想があった。

【学生の感想】

日本人学生:

●留学生3人と共に意見し合いましたが、みんなとてもいい意見を持っていてすごいと思いました。日本語をどう表現するのか分からない所などは積極的に聞いてきてくれて、私も分かりやすく伝えるように一生懸命教えることをしました。全てのグループがこの課題を選択し話し合っていたので、口頭発表の時のみんなの意見はとても参考になりました。自分の意見を言えるという機会があることはとてもいいことだと思います。思っても口に出して言うことではないし、それについて友達と話し合うことがあまりないので、それぞれの人がどんな考えを持ち、感じているのかを知ることができた、いい会でした。(女子)

●アルバイトに関する討論は、普段自分が思っていることとは逆のことを発表しなければいけなかったのが、大変だった。私はアルバイトに反対の学生を担当したが、私と同じ立場で発表した人の意見を聞いていて、同じ立場でも理由が「勉強のため」と「遊びたいから」といったように全く違った意見が出てきたりして面白いと思った。この討論でもやっぱり留学生がすごいと思った。全員の意見を聞いていて、日本人より留学生の方がしっかりした意見をだしていたように思えた。(女子)

●賛成論、反対論両方とも筋が通っている説明でした。良いこと、悪いこと、両方あるんだなって。大学生って自由だけど、裏には責任があって...。自分で責任を負える程度のアルバイトなら良いと思います。授業や試験に支障が出てしまわなければ、私はアルバイトがありだと思えます。(女子)

留学生：

●先週の授業で4人1組のグループを作り、二つの課題の中から一つ取り組むものを決め、いろいろな人物の意見を考えてまとめ、メモをして、口頭発表しました。面白いことは全グループが同じ課題を選んでいました。そして、同じ人物の立場に立ち、意見を言ったがそれが全然違う。例えば、反対の親の立場に立ち、あるグループは「大学生は何時間もアルバイトをやったら、寝る時間がなくなる。授業がうまくできない。試験に合格できないで、留年の可能性がある。」の側面を考え、あるグループは、「生活費と学費などほとんど両親が払い、大学生はアルバイトをやる必要がない」と考え、または「アルバイトをやり、給料をもらって、タバコを吸い、酒を飲み、悪いことをやる」からと考えるなど、同じ人物の立場に立ちながらも、考え方はこんなに大きな違いがある。なぜ、同じ人物で考える面が違うかということ、それは人々の認識の仕方が違うからだと思う。人々の経歴が違うから同じ立場でも視点を変えることで、認識も様々だろう。(男子)

ここで行ったような個人の役割の観点からある課題に対しての意見を述べ合うことで、相互理解が進むことが読み取れる。また、同じ立場に立っていても意見が様々にあり、物事の捉え方は決して一様ではないことを理解している様子が分かる。

7) インタビュー（6月2日、9日、16日、23日、30日の全5授業で実施）

これは本科目の言わば総大成としての位置づけを持つ。つまり、これまで行ってきた活動で身に付けたコミュニケーション技能のすべてを使い、学内の教員へのインタビューを計画し、実行し、それをまとめて口頭報告することに取り組んだのである。この活動名は「この先生にインタビュー！」とした。

インタビュー・シート作りから口頭報告までを3人1組のグループを作り行った。グループは日本人学生が1人いるものが7組と、2人いるものが1組であった。これまでの諸活動を通して、留学生と日本人学生とがそれぞれ支え合って取り組める姿勢を養ってきた。しかし、実際のインタビュー場面を考えると留学生のみでは、日本語力の点から相手に質問しその答えを正確に把握し、それを基により深く相手に迫っていくことは無理であろうという教師側の判断が入っている。そこで日本人学生が言語力の面で留学生を支援し、両学生が混じる形態で実施とすることにした。

(1) 「スタジオパークからこんにちは」を視聴しての分析（6月2日実施）

6月1日にNHK総合テレビで放映された「スタジオパークからこんにちは」を使った。これはアナウンサー2名がゲストの中村雅俊にインタビューしながら、様々な角度からその生き様に迫っていくものであった。インタビューをされる側も見つつ、する側に立ってそのやり方を分析していくのがねらいであった。

次の指示を与えたうえでビデオ分析を行った。

<ビデオ分析の指示>

中村雅俊がどういう人物かに幾つかの視点から迫ろうとしている。具体的な物（写真、動画、音楽、ビデオレター）を利用しながら、エピソードを引き出そうとしている。特に、司会者の二人がどういう質問を発しながら、番組を進めているかを中心に分析を行う。テ

ポップで流れる質問（文字情報）にも注意しながら観ていく。項目毎にメモを作ること。

<項目>

- 清水の次郎長（俳優としての中村雅俊）
- 歌と俺（歌手としての中村雅俊）
- 音楽番組の司会者（司会者としての中村雅俊）
- 「私の宝物」コーナー

次の問いの答を探しなさい。

- 1) 宝物は何か。
- 2) どのようにして手に入れたのか。
- 3) 司会者は何を見せながらインタビューを展開しているか。

ビデオ分析を終えた後、まとめとして次の4点を指摘した。

<振り返り>

次の事柄に気づきを持ちましたか。

- 1) インタビューをするには目的がある。
- 2) 周到な準備が必要である。
- 3) 相手が話しやすいようにするには「物」の利用が役に立つ。
- 4) 笑顔が出る対話展開を作ることが大切である。

(2) インタビュー・シート作り（6月9日実施）

次の諸点をグループで話し合い、一覧表にまとめていった。事前の準備がインタビューの成否を決定すると言っても過言ではないので、時間をかけて念入りに作成するようにした。

<展開>

- (1) 自分たちのグループでどの先生に何をインタビューするかを話し合い、決めていきます。次のものを利用します。

『教員プロフィール2006』、『学生便覧2006』、『静岡産業大学情報学部研究紀要第8号』

- (2) 話し合いの結果を次にまとめなさい。

●インタビューする先生についての基本情報

氏名： 研究室番号： 研究室TEL： メールアドレス：
担当科目：

●インタビュー（何を聞くか・知りたいか）の概要

- (3) 図書館には先生方の著作物があります。また、先生方個人がホームページを開いている場合もあります。それらを利用して、具体的なインタビュー項目を作成し、次回の授業に持参しなさい。*10~15分で完結するものを全員が参加して決定する。

【インタビュー項目】 【利用できる具体物】

各グループの動きは「記録用紙」（*資料1）にチェックし把握するようした。7つのグループが本学部の専任教員、1つが非常勤教員を選んだ。インタビューをお願いする教

員には事前了解を筆者が取った（非常勤教員へは事務局職員から連絡をして頂いた）。

6月16日の授業でインタビュー・シートを完成させ、6月19日から23日の2限目までの間で、インタビューを行った。インタビューに臨むに当たっては次のことを注意させた。

- インタビューに行く前に先生にアポイントを取り、時間を決めて伺うこと。
- 時間は15分程度とする。
- インタビュー時の写真を携帯電話のカメラ機能にて撮り（先生に写真撮影の了解を取る）、一番良くとれているものを1枚、長谷川までメールに添付して送ること。
送付期限は6月23日（金）13時30分とする。
- インタビュー内容は3人全員でメモを取ること。その後、口頭報告が出来るようにグループで整理すること。口頭報告書の作成については次回の授業にて詳しく行います。
- 30日の授業で1グループ3分の口頭発表を行います。口頭発表はインタビュー時の写真をクラスで見ながら行います。

(3) 先生とのインタビューそのもの（6月19日から6月23日実施）

実行されているかどうかは、実施時に撮った写真がメールに添付されて届いているかどうかで把握していった。期限が迫ってきても届いていないグループへは、届いたグループの学生にこちらからメールを送り催促を口頭で伝えてもらった。ある先生からは学生達がインタビューに来て、楽しい時間を過ごせたとのコメントが添えられたメールが届いた。私のところにインタビューに来るはずのグループにアポイント当日ハプニングがあった。一人の留学生が他の2人がいないので、彼一人で行わせて欲しいとやってきた。3人がそろわないと、条件（インタビュー時の約束）にかなっていないし、一人では満足いくインタビューができないことを論じ、グループとして再度やってくるよう話した。昼休みにメールをチェックしていると本科目を履修している日本人学生（彼のグループ構成員ではない学生）から、この件についてメールが入っていた。当該留学生が困っているのを聞いたのでなんとか助けてあげたい、との内容であった。この授業において、このように支援を必要とする学生が他の履修生に支援を求め、求められた学生が行動に移すコミュニケーション力と実行力が育っていたのである。グループとして来るならば、本来の構成員ではなくてもインタビューに応じることを条件にし、支援の手を差し伸べた学生に返信メールを出した。そうすると当該留学生は日本人一人と留学生一人と共にやってきた。早速インタビューを行い、写真も撮って、時間内にそれなりの成果を得て帰った。これらの成果は口頭発表にて報告された。

(4) 口頭報告アウトラインの作成（6月23日実施）

ここでは「アウトライン」というよりも発表原稿そのものの作成となった。「アウトラインの作成」で示した「結論+序論」から書き始めようとして悪戦苦闘している学生達を見て、まずは「本論」をインタビュー項目毎に整理してまとめ、それから結論を考えると、そして「結論+序論」は最後に書くよう指導した。机間巡視していると留学生達がグループの中で原稿作成に参加できずに、ある者はおしゃべりに、またある者は手持ち無沙汰に時間を無為に過ごしていた。発表原稿作成にはそれ相当の日本語力がないと取り組めないことが分かる。各グループの言わばまとめ役となる日本人学生がほとんど一人で鉛筆

を動かしているグループが多く見られた。このようにならないためには、留学生に自身が受け持ったインタビュー項目を書き出す時間を与え、それをグループでまとめていく等の活動のスムーズステップ化を考えて仕組むことが必要となろう。

<展開>

演習1：構成を考える

結論＋序論 → 本論 → 結論

演習2：本論をつくるポイント

問：インタビュー・シートに書き出した3大項目全てへの回答が得られたか。

どの情報（回答内容）に最も興味を感じたか。

どの情報（回答内容）はあまり関心を持たなかったか。



どの情報を使うか（情報の取捨選択） + どのような順番で話すか（情報の構造化）

演習3：アウトラインの作成（『プラクティカル・プレゼンテーション』p.9参照）

次の目安を基に、グループ毎にアウトラインを作成しなさい。

●話すスピードと文字数の目安

1分間=250字

少しゆっくり目のスピードです。初めてのことを聞く人にも分かってもらうにはこのくらいのペースで話しようにします。

●アウトライン作成の目安（3分間の発表時間なので総字数は750字となります）

結論＋序論	——	（あいさつ＋概要）	15%	45秒＝113字
本論	——	（インタビュー内容の詳細報告）	80%	2分40秒＝600字
結論	——	（まとめ＋あいさつ）	5%	15秒＝37字

(5) 口頭報告（6月30日実施）

<展開>

演習1：発表原稿（アウトライン）による練習

- ・グループ毎に書き上げた発表原稿（アウトライン）を使い、リハーサルをしなさい。
- ・出だしと終わりの言葉

はじめに：「これから～先生へのインタビュー内容を紹介します。」

終わりに：「以上で、～先生へのインタビューの報告を終わります。」

演習2：発表（口頭報告）する（各グループ3分間）

- ・リラックスしよう。
- ・一礼して始めよう。終わりににも一礼を忘れないようにしよう。
- ・大きな声で、堂々と発表しよう。
- ・聞き手はグループの発表が終わったら、盛大な拍手をしよう。

*アイコンタクト、姿勢、声、速さ、発音を評価シートで評価します。これらの評価項目

を見ておきましょう。

演習3：評価する（評価シート）＊資料2

- ・各グループの発表を評価シートを使い評価します。発表したグループの構成員自身も評価シートを使い評価を行い、より良いものにする為に役立てましょう。
 - ・聞いている者が付けた評価シートはグループに戻しますので、グループ全員で一読しなさい。これらの評価シートはグループで集め、次の授業に持参し長谷川に提出しなさい。
- ◎本時の終了後に次のものを提出しなさい。
- 1) 発表原稿（アウトライン）
 - 2) グループの構成員自身が付けた評価シート

3分間をタイマーで計時しつつ口頭報告を進行した。グループ全員が発表原稿のどこかを担当して口頭発表するようにした。多くの学生は原稿から目が離れず、聴き手とのアイコンタクトは保たれない状況であった。評価シートの「自分の口頭報告での気付き」を読むと、学生達はかなり緊張していたことが分かる。原稿の構成は多くのグループにおいてしっかりとまとめられていた。＊資料3

8) 群読を楽しむ（7月7日と14日実施）

7月7日と14日の2回の授業を当てて、群読と要約文の作成を実施した。これらの活動のねらいを次のように提示した。

<ねらい>

★群読

音声コミュニケーションの目的の一つに言葉を声に出し楽しむことがあります。素敵な詩に出会った時に、思わずそれを声に出して読んでみたことはありませんか。心が躍る（体の中でのことで見えません）ことに出会うと、表情にも明るい笑顔が出ますね（こちらは見えます）。この体験を皆さんと共に分かち合いたいと思います。

★要約文

期末試験が近づいています。レポートを書く課題はありませんか。課題図書を読み、その内容を要約して書く力は、レポートを書く際に重要です。また、普段の生活の中で、自分が見た映画、テレビドラマ、その日に出会ったことを要領よく要点を押さえて相手に伝える際にも、要約力が求められます。この力を少し鍛えてみましょう。

<展開>（7月7日実施のもの）

演習1：群読を楽しむ

- 詩を使って行います。（「アンチユール・ランボー」訳／小林秀雄）

群読とは1つの同じフレーズ、文、セリフなどを複数の人が声に出して読んでいくことです。内容が分かった上で、1つのフレーズをどのような調子で読むかを決めていきます。また、誰がどこを担当するかも決めていきます。グループで練習し、公演をするつもりで、クラスの友達に発表してみましょう。

- 6人1組のグループで活動します。

演習2：要約文を書く

- 要約文を書く際のポイントは読んでいる内容から5W1Hを捉えることです。5W1

Hとは、Who, What, When, Where, Why and How のことです。つまり、「誰が、何を、いつ、どこで、なぜ、どのように行ったか」を捉えながら、本文を読んでいきそれらをまとめると要約文が出来上がります。

(例) 小中学校などに「栄養教諭」配置へ(栃木)

県教委は来年度から、食に関する指導と学校給食の管理を担う「栄養教諭」を、公立小中学校などに配置する。平間幸男・県教育長が3日、県関係の国会議員との懇談会で明らかにした。〈よみうり教育メール(発行日:2006.07.04)より〉

誰が: 栃木県の教育委員会が

何を: 「栄養教諭」を

いつ: 来年度から

どこで: 栃木県内の公立小中学校など(に配置する)

演習3: 無言で伝言ゲーム

4人からなるグループが1列になり、渡された文章の内容を一定時間で声に出さずに読み取り、それを要約し、次の人に伝えていきます。読む時間と要約する時間が指定されます。また、要約する際には「渡された文章」を読むことは出来ません。

9) 要約文を書く(7月7日と14日実施)

<展開>(7月14日実施のもの)

演習1: 群読を楽しむ

●グループ分け

日本人学生(9名)、留学生男子(6名)、留学生女子(9名)の3つのグループで群読を行います。

●「生きる」(谷川俊太郎)を材料として使います。

●グループ別練習(10分間)*グループ毎に独立した教室で練習します。

次の「群読の練習方法」により行います。(家本「教育実践ノート」3章群読より)

1. まず全員で声をあわせて読みます。
2. 1文読みをします。ひとりが一文だけ読み、次々に読みまわしていきます。このとき、読みのまちがいやアクセントなど批評しあってなおしていきます。
3. 読みかたをきめます。ここは強く読もう、ここはゆったりと読もうなど文の内容にあわせて、話しあってきめます。
4. 再び、3できめた読みかたにしたがって全員で読みます。ひとりひとりが、完全に3でまとめたように読めるまでくりかえして読みます。暗唱するくらいまで読みます。
5. また、1文読みをします。3で確認したように読んでいるかどうか、お互いに注意しあいます。
6. どう分読するか話しあいます。ここはソロ、ここは、女子のコーラス、全員のコーラスというように文の内容にあわせてきめていきます。
7. 分読の分担をします。ソロはだれ、アンサンブルはだれだれときめていきます。
8. 各自自分が読むところを確認します。
9. 全員で読みますが、自分の分担以外のところは、声を小さくして読みます。

10. 分読して読みます。自分の分担だけ読むわけです。うまくそろわなかったら、9に戻って練習します。

*指揮者をつけてもいいでしょう。

11. 発表体型に並んで練習します。誰かに聞いてもらって批評してもらおうといいでしょう。

●全グループが指定された時間までに教室に戻ります。

●グループ別発表

演習2：要約文を書く

●まとまった内容のある文章の要約文を書く（「犬の保育園」中日新聞、2006. 07. 02より）

【課題】本文を読み、必要とする情報を書き出し、要約文を作成しなさい。

・別紙により行います。ワークシートの使い方の説明をします。

・本文を読み質問の答えを見つけ出しメモを作る時間と要約文を書く時間はそれぞれ制限されます。本文はメモ作成後回収します。その後は自分で書いたメモを基にして、要約文を作成しなさい。

*アンケート（資料4）：別紙のアンケートを行いますので、全ての項目に答えて下さい。目的は皆さんが本科目にどのように取り組み、どのような成果があったかを捉えることです。よろしくお願いします。

7月14日に実施した群読のグループ別発表は留学生女子チーム、同男子チーム、そして日本人男女混合チームに分かれて行ったが、各チームが持ち味を出した発表になった。留学生女子チームは「生きる」全編をソロも入れて群読した。男子チームは詩の途中までではあったが、力のこもったエンディングが効果的であった。日本人男女混合チームの群読はそのまま公演に持って行けるほどの出来映えであり、留学生達は皆そのすばらしい群読に感動していた。

要約文の作成は日本人学生にとっても難しいものであり、もっと時間かけて取り組む必要があると感じた。口頭表現ならなんとかかなるものの、要約し書いて伝えることとなると、特に日本語力の乏しい留学生にとっては難関であった。

4. アンケート結果の分析と考察

ここでは授業の最終日に実施したアンケート（資料4）により、前章で考察してきた諸活動に学生がどのように取り組み、どう評価しているかを分析し考察する。

【アンケート回答者情報】

アンケート回答者人数： 23名（日本人学生9名／留学生14名）

男女別： 男10名（日本人学生5名／留学生5名）／女12名（日本人学生4名／留学生8名）*1名は留学生で男女不明者

4.1 各活動は意義深いものであったか

表1に見るように、実施した主たる13の活動のうち、「とても意義深い」と「意義深い」

を足した割合が9割を超えている活動は、7つある。95%以上ものは、「名刺交換会」、「他者紹介」、「ロールプレイ」、「インタビュー・シート作成」、「インタビューそのもの」、「要約文を書く」の6つの活動であり、「口頭報告」は91%であった。これらの活動についての学生のコメントを紹介しつつ考察する。(日男=日本人学生男子、日女=日本人学生女子、留男=留学生男子、留女=留学生女子)

表1： 主たる活動の評価 (%)

実施した諸活動	とても	意義深い	あまり	意義深くない	合計
名刺交換会	36%	59%	5%	0%	100%
他者紹介	30%	65%	4%	0%	100%
私の名前の意味	22%	61%	17%	0%	100%
日本一長い名前 (寿限無)	26%	57%	17%	0%	100%
ロールプレイ	36%	59%	5%	0%	100%
議論する4人組	35%	43%	22%	0%	100%
スタジオパーク視聴分析	36%	41%	23%	0%	100%
インタビュー・シート作成	39%	57%	4%	0%	100%
インタビューそのもの	39%	57%	4%	0%	100%
アウトライン作成	29%	52%	19%	0%	100%
口頭報告	27%	64%	9%	0%	100%
群読を楽しむ	22%	57%	22%	0%	100%
要約文を書く	22%	74%	4%	0%	100%

1) 名刺交換会 (95%/5%) *かっこ内百分比はスラッシュの前が「とても意義深い」と「意義深い」を合わせた値、後が「あまり意義深くない」の値。以下同じ。

- みんなを知れてコミュニケーションを取れたからよかった。(日男)
- いろいろな人と知り合えて「知己の友」になれたと思う。(日男)
- 初めて留学生と話すことができたから。(日女)
- 早く人の名前と顔を覚えられてよかった。(日女)
- 友達を作るため。(留男)
- 交流の最初は重要です。(留女)

第2回目の講義に実施したこの活動は、履修者が相互に名刺を介したコミュニケーションを通して知り合いになるという目的を達成するうえで意義深いものであった。

2) 他者紹介 (96%/4%)

- その紹介した人とより強い絆が深まったと思う。(日男)
- 恥ずかしいけど人間に慣れられるし、外国人とも仲良く慣れたからよかった。(日男)
- どのような人か理解できるから。(日女)
- 自分じゃなくて人を紹介するのが楽しかった。(日女)
- 他人のことを知りました。(留男)
- 他人の興味などを理解できます。(留男)

他者紹介により、対人コミュニケーションの目的の一つである相互理解が深まっている

様子が分かる。

3) ロールプレイ (95%/5%)

- ・感情を作り、学び、練習し、それをみんなで出す。おもしろかった。(日男)
- ・一緒にやることによって仲が深まるから。(日女)
- ・恥ずかしかったけど楽しかった。(日女)
- ・人の気持ち考える上で必要。(日女)

この活動は楽しく取り組むことができ、自分の役割を工夫して演じることで履修者相互の人間関係を強化すると感じている様子が分かる。

4) インタビュー・シート作成 (96%/4%)

- ・留学生との交流があった。(日女)
- ・何を聞くか考えるのが大変だったけど、みんなで考えることがいいと思う。(日女)
- ・先生についてどんなことを聞こうかわくわくした。(日女)
- ・チームワークします。(留男)

日本人学生と留学生が相互に協力し、インタビューする内容を話し合い、検討して決めていく過程を通してコミュニケーション力が育っていくのを伺い知ることができる。

5) インタビューそのもの (96%/4%)

- ・先生の知らなかった意外な一面や面白いエピソードを聞いて面白かった。(日男)
- ・先生の考え方、信念を知ることができました。(日男)
- ・先生の生き方を知れてよかった。(日女)
- ・先生と仲良くなれるから。(日女)
- ・役割を決めてしっかり進められた。(日女)
- ・一人でインタビューしてたし。(日女)

インタビュー相手の知らなかった事柄をこの活動により知り得たし、この機会を通して相手と仲良くなることができたことは、コミュニケーション活動が生きて働いた結果である。最後の2つのコメントにあるように、あるグループでは役割分担のもとにインタビューをグループ活動として進めることができたが、他のグループでは一人だけが活動を担っていたことが分かる。最後のコメントの学生はこの活動はあまり意義深くないとしていた。

6) 要約文を書く (96%/4%)

- ・意外と難しかった。でも留学生も頑張ってるから頑張った。(日男)
- ・難しかったけど頭を使った。(日男)
- ・うまくまとめる方法を学べて良かった。(日男)
- ・国語能力も身につくから。(日女)
- ・考える力がついたと思う。(日女)
- ・日本語の勉強に必要。(日女)

まず、文章を読んで理解し、それを要約して書くのは難しいことであることが分かる。この困難な活動に留学生が一生懸命取り組んでいるのを見て、日本人学生は自分も頑張ろうという姿勢になる。日本語力において差のある留学生の存在が日本人を奮い立たせる。共に学び合おうとする学習集団がここにあったことに気付く。

7) 口頭報告 (91%/9%)

- ・時間が足りなくなった。(日男)

- ・緊張した。(日男)
- ・いろんな先生について知ることができるから。(日女)
- ・自分達のやったことを発表できて、みんなに知ってもらえてよかった。(日女)
- ・自分の発表能力の練習ができました。(留女)

発表原稿の作成はしたものの、時間を計ってのリハーサルまではできていなかったことが原因となり、口頭報告では時間不足になったり、発表時に緊張して原稿から目が離れなかったりした様子が分かる。この活動では、自分たちのまとめたインタビュー内容を知ってもらうことと共に、他のグループの報告を聞いてそのグループが行ったインタビュー相手の先生について知る、というコミュニケーションの喜びも味わったようである。

次いで、「とても意義深い」と「意義深い」を足した割合が83%～81%にある活動は、「私の名前の意味」、「日本一長い名前(寿限無)」、「アウトライン作成」の3つであった。これらの活動についての学生のコメントを紹介しつつ考察する。

8) 私の名前の意味 (83%/17%)

- ・みんないろいろな意味があり知れて良かった。(日男)
- ・僕の名前を改めてよく知ってもらい、また、名前の深い意味を改めて知った。(日男)
- ・皆の名前の由来はどれもおもしろかった。(日男)
- ・人に伝えるのもよかったけど、自分の名前の意味を知れたのがよかった。(日女)
- ・特にない場合もあるので。(日女)
- ・親に意味を聞いても親があいまいだった。(日女)
- ・知ってもらってもなあ…(日女)

この活動は自分の名前(姓ではなく)の意味を親に尋ねるなどして調べて、それをペアの相手に伝える、また、4人1組になり伝え合うというものであった。個人での調査がもとになる活動であり、グループの中で一つのものを作り上げるという種類のものではなかった。個人で取り組んでみたところ、後半の3つのコメントに見られるように、あまり意義深いものではなかった様子を伺い知ることができよう。

9) 日本一長い名前(寿限無) (83%/17%)

- ・知ってました。(日男)
- ・とても欲の張った名前でもとてもおもしろくて、結末もおもしろい。(日男)
- ・初めて知った。(日男)
- ・日本語練習にはなると思った。(日男)
- ・一つ一つの意味が分かって面白かったから。(日女)
- ・みんなで読むのが楽しかった。(日女)
- ・日本語がむずかしい。(留男)

この活動もまた個人で行う所までのものであった。本科目開始間もない所での実施でもあり、群読まではいかなかった。よって、初めて知った者にとっては、関心の度合いが高く意義深かったが、知っている者にとってはそうではなかった。また、留学生にとっては謎めいた言葉の羅列と捉えられたようであった。

10) アウトライン作成 (81%/19%)

- ・うまい原稿の作り方が学べた。(日男)
- ・一人活動でした。個々に書かせるべき。(日女)

- ・留学生があまり考えてくれずに大変だった。(日女)
- ・うまく伝えるようにしなければいけないので大切だと思う。(日女)

2番目と3番目のコメントにあるように、日本人学生のみが行っていて、留学生はその日本語力が問題となり参加できえず、グループ活動として成立してなかったところがあった様子が分かる。

「意義深くない」との回答はいずれの活動に対してもなかったものの、「あまり意義深くない」とした割合が2割をやや超えるものが、「議論する4人組」、「スタジオパーク視聴分析」、「群読を楽しむ」の3つの活動に見られた。これらの活動についての学生のコメントを紹介しつつ考察する。

11) 議論する4人組 (78%/22%)

- ・物事には長所、短所、それぞれ対になっているものだと思う。(日女)
- ・自分の意見ではなく自分が当たった役割の気持ちだから。自分の考えを言い合いたかった。(日女)
- ・やっていることがあまりよく分からなかった。(日女)
- ・自分の意見を言いあいたかった。(日女)
- ・他人の立場に立ち、意見を発表すると、他人を理解できます。(留男)

グループとして何かを遂行する種類の活動とは異なり、役割により個人が課題に対する意見をまとめて、それを口頭でグループ内において発表し合うものであった。役割により意見が異なってくることへの気付き等がコメントから分かる。与えられた役割での意見交換よりも、自分自身の意見を述べ合うことの方が活動を活発にすることを示唆するコメントもあった。

12) スタジオパーク視聴分析 (77%/23%)

- ・見取る、書き取る力をつくと思った。(日男)
- ・よく分からなかった。(日男)
- ・中村さんが清水の次郎長をやってくれて光栄なのと知り、いろんな活動に関心を持っていた。(日男)
- ・インタビューをするニュースキャスターとかの気持ちが分かりました。(日男)
- ・その人のことを知ろうという気持ちが強くなった。(日女)
- ・内容は読み取れてもあまり意味がないと思うから。(日女)
- ・自分でやるのとプロ組織がやるのでは違う。(日女)

インタビューへの助走として最初に行った活動であった。どこに視点を置いて分析的に視聴するかをワークシートで示して行ったので、この番組の内容理解はできていたようだ。しかし、最後の2つのコメントにあるように、理解できたことを実際のインタビューでどう活かせるのかが明確につかめない歯がゆさが感じられる。

13) 群読を楽しむ (78%/22%)

- ・なんか皆で協力できて楽しかったです。(日男)
- ・合わない所もあった。(日男)
- ・気持ち込めてやれた良かった。(日男)
- ・おもしろくなかった。(日男)
- ・みんなと力を合わせて練習し頑張ったから良かった。(日男)

- ・協調性が鍛えられる。(日女)
- ・まとまりができた。(日女)
- ・楽しいが、特に意味はないと思う。それよりは一人でやった方が伝わり方が違うと思う。(日女)

グループとして一つの活動をまとめていく楽しさを味わった学生が多くいた反面、どこかうまく噛み合わずに、この活動に関心を持てなかった者もいた。後者に属する学生の中には共同でやることを好まない性向を持つためか、解釈したことを個人で表現する方が良いとコメントした者もいた。

4.2 グループ活動を通して得たこと

このアンケート項目では、グループの中での様々なコミュニケーション活動を通して、本科目で目標にしている3点つまり、「自分に自信がついてきたか」、「相手を思いやる気持ちが育っているか」、そして「他者に貢献できていると感じたか」を尋ねた。結果は表2～表4に示すようになった。

表2 自分に自信がついてきた

	日本人学生	留学生	全体
強く感じる	0%	29%	17%
感じる	100%	64%	78%
あまり感じない	0%	7%	4%
感じない	0%	0%	0%
合計	100%	100%	100%

日本人学生は全員が「感じる」と回答し、留学生は「強く感じる」と「感じる」の合計が93%であった。実感している程度では留学生の方に強く感じる者の多いことが分かる。いずれにしても、グループでのコミュニケーション活動が日本人学生と留学生の双方にとり自信をつけるように作用したことが分かる。

表3 相手を思いやる気持ちが育っている

	日本人学生	留学生	全体
強く感じる	22%	14%	17%
感じる	67%	86%	78%
あまり感じない	11%	0%	4%
感じない	0%	0%	0%
合計	100%	100%	100%

「強く感じる」と「感じる」を合計した値は日本人学生では89%、留学生では100%であった。グループでのコミュニケーション活動を通して、良好な人間関係を構築するために大切な相手を思いやる気持ちが、日本人学生と留学生の双方に育ってきているのが分かる。「あまり感じない」との回答は日本人学生の11%において見られた。

表4 他者に貢献できている

	日本人学生	留 学 生	全 体
強く感じる	11%	21%	17%
感じる	67%	72%	70%
あまり感じない	22%	7%	13%
感じない	0%	0%	0%
合計	100%	100%	100%

「強く感じる」と「感じる」を合計した値は日本人学生では78%、留学生では93%であり、その割合は留学生の方が15%多かった。また、「あまり感じない」とする日本人学生は22%いたが、留学生では7%であった。他者に貢献できていると感じた者は、グループ活動で自分が何らかの形で役に立っていると自己評価できたことになる。

4.3 最も楽しむことのできたグループ活動

回答のあったグループ活動を全体的に見てそのパーセンテージの多い順に並べたのが表5である。

表5 最も楽しむことのできたグループ活動

	日本人学生	留 学 生	全 体
インタビューそのもの	22%	42%	33%
ロールプレイ	34%	9%	19%
インタビュー・シート作成	0%	25%	14%
群読を楽しむ	22%	8%	14%
議論する4人組	11%	8%	10%
報告アウトライン作成	11%	0%	5%
口頭報告	0%	8%	5%
合計	100%	100%	100%

主たる活動の評価で考察したように、全体順位上位1位から3位までは95%を超える値で有意義と回答された活動である。これらの活動の中で一番楽しめたものは日本人学生では「ロールプレイ」(34%)であり、留学生では「インタビューそのもの」(42%)であった。「インタビュー・シート作成」と回答した日本人学生はいなかったが、留学生では25%の回答があった。これを挙げた留学生の回答理由に「3人で協力して完成しました」と書かれていた。グループ内でのこのような協同作業が楽しく活動できた理由となっているのが分かる。

逆に「報告アウトライン作成」では、日本人学生の11%が一番楽しめたとしたが、留学生では皆無であった。同じ書く活動でも「報告アウトライン作成」においてはより高度なまとめる力と表現力が求められる所から、留学生にはそこまでの力がなくグループ活動として楽しめるまでは行かなかったのではないかと推察される。

「ロールプレイ」と「群読を楽しむ」では日本人学生は前者が34%後者が22%であった

が、留学生では前者が9%後者が8%と一桁止まりであった。書く日本語力がどちらかと言えば求められない、「インタビューそのもの」や「口頭報告」を取り上げて楽しく取り組めたとする回答が日本人学生に比して留学生には多かった。

4.4 日本語でのコミュニケーション力が育まれてきているか

本科目のねらいである日本語でのコミュニケーション力は本論で考察してきた授業展開により育まれてきたであろうか。次の表6を見てみよう。

表6 日本語コミュニケーション力が育まれてきていると感じるか

	日本人学生	留学生	全体
強く感じる	13%	38%	29%
感じる	75%	62%	67%
あまり感じない	13%	0%	5%
感じない	0%	0%	0%
合計	100%	100%	100%

本科目での様々な活動を通して、日本人学生の88%、留学生では全員から日本語でのコミュニケーション力が育まれてきている、との回答があった。日本人学生の13%からは「あまり感じない」との回答があったものの、全体としてみれば96%もの高い割合で本科目の目標が達成されているのが分かる。

4.5 留学生へ日本語力は十分か、日本語力は高まったか

本科目の履修条件として留学生には「日本語能力試験2級相当以上の日本語力」をあげておいたが、授業を展開していく中で活動を日本人学生並みに行うには日本語力が多くの留学生に不足しているのを痛感した。そこでこの質問を留学生へぶつけてみた。

表7 日本語力十分か／日本語力は高まったか

	強くそう思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない	計
日本語力十分	15%	62%	23%	0%	100%
日本語力高まった	8%	92%	0%	0%	100%

77%もの留学生が本科目を履修するうえで日本語力が十分あると回答してきているが、彼等の活動実態を観察しての筆者の実感とは少しかけ離れた数字であるように思う。全体的に見て、留学生の日本語力は活動を遂行するに当たり不十分であると感じることが多々あった、というのが筆者の持つ実感である。また、この科目の履修を通して留学生全員が日本語力が高まったと回答した。

4.6 科目履修者に友人ができたか

科目履修者同士が友人になれるためには、相互の信頼関係が築かれている必要がある。この相互信頼関係は活発なコミュニケーションがなければあり得ない。そう考えると友人

ができたかどうかは、展開した活動での活発なコミュニケーションの成否を問うことでもある。

表8 科目履修者に友人ができたか否か

	日本人学生	留 学 生	全 体
できた（相手日本人学生）	17%	0%	5%
できた（相手留学生）	0%	15%	11%
できた（相手両方）	83%	77%	79%
特にできなかった	0%	8%	5%
合計	100%	100%	100%

友人ができたとする者が全体の約8割を占めた。日本人学生と留学生の両方にできたとする者は、日本人学生で83%、留学生で77%であった。活発な相互交流の基に、信頼関係が生まれなければ友人ができるまでには及ばないことを考えると、履修者は展開された活動を楽しみながら行う中で、コミュニケーションを実際に取りつつ人間関係を育んできたと言えよう。

4.7 人生のコミュニケーション場面で役立つか

本科目で養ってきた日本語での対人コミュニケーション力は今後の彼らの学生生活において、ひいては彼らの人生のコミュニケーション場面で役に立つものであろうか。

表9 人生のコミュニケーション場面で役立つ

	日本人学生	留 学 生	全 体
強くそう思う	0%	8%	5%
そう思う	100%	92%	95%
あまり	0%	0%	0%
そう思わない	0%	0%	0%
合計	100%	100%	100%

本科目で学んだことが今後の現実のコミュニケーション場面で役に立つとの回答が、全回答者から得られた。現実のコミュニケーション場面からすれば、ほんのわずかな状況を切り取ったに過ぎない中での活動を設定しての取り組みであったが、自分に自信を持って発言し、相手を思いやって相互交流を図ることで、良好な人間関係を構築するために求められる、言わば対人コミュニケーション能力のエッセンスを各履修者が確かな手応えでつかみ取ったものと思われる。

5. おわりに—グループで協同して学ぶことの大切さ：促進的相互交流がコミュニケーション力を育む—

本論で述べたように2006年度の「コミュニケーション基礎」では、グループの中で様々

な活動が展開された。日本人学生が9名と留学生が15名いるクラスであったので7つの組は日本人学生1名と留学生2名からなる3名で1組とし、もう1組は日本人学生2名と留学生1名からなるものとし、これをグループの基本形とした。この全部で8組のグループは固定したものではなく、活動種によりカードを使う等して編成を変えた。各グループの中では、留学生の日本語力が十分ではないことが理由となり、何をすることも日本人学生はまとめ役として活動した。特に、ロールプレイ活動の辺りからは、日本人学生が留学生をサポートしつつ各活動を展開する形ができるようになった。表2で見たように自分に自信がついたと感じる日本人学生は100%であった。彼等はグループ活動をリードする中で自信を育てて行ったように思う。本クラスは留学生が全体の6割を超える履修者数の構成比であったが、このようにグループで活動することで表7で考察したように、留学生が適切な状況・場面で日本語表現を使うことにより、彼等の日本語力を押し上げる学習効果が現れた。

教室で伸び伸びとしたコミュニケーション活動が実施できるためには、相互に相手を包み込む暖かな一体感が醸成されている必要がある。D.W.ジョンソン他(2001, p.59)は「協調的な情緒的雰囲気」が学習者の生産性を上げるとして、次のように述べている。

生産的になるには、学生は結束し、協調的な情緒的雰囲気をつくらなければいけません。クラスや大学内での人間関係が受容的になるほど無断欠席は減り、学習に対する学生の熱意、与えられた課題に対する責任感が強くなり、困難な課題に挑戦しようという気持ち、学習課題に取り組むための動機づけや忍耐、満足度や士気、成功には不可避の苦労や障害(挫折)に耐える力、外部からの避難や攻撃から仲間を守ろうとする意識、仲間の発言に耳を傾け影響を受け入れようとする態度、仲間の成功や成長のために関わろうとする気持ち、さらには、生産性や成績の向上が期待できるのです。

本科目でのこの「協調的な情緒的雰囲気」の萌芽は、早くも第2講目に実施した「名刺交換会」に対する学生の感想に読み取れる。その箇所を再度考察する。

日本人学生の感想：「ちゃんとできるかどうか不安だった。自分の作った名刺を出すのは恥ずかしかったけど、「すごいね」とか言ってくれる人がいてうれしかった。普通の授業だと他の人と話す機会なんてまったくといっていいほどないので、いろいろな人と、特に留学生と話げたのはうれしかった。…今まで、留学生に話しかけたりするのは「話しかけにくい」とか「会話が噛み合なかったらどうしよう」とか考えていたからできなかったけど、話しかけてみるととても話しやすかったし、とても楽しかった。」

何をすることも最初は不安である。だが、そこに飛び込ませるように仕組み、学生がその不安を乗り越え、コミュニケーションすることの喜びを味わえば、後は自分で動き出すのである。この学生が「すごいね」とか言ってくれる相手と出会ったことは大きな収穫であった。この賞賛により、学生にコミュニケーションする喜びが生まれ、これが自分に対する自信を生み、クラスの学生と積極的に交わる方向に揺り動かすのである。感想の後半からは留学生との心の距離が縮まった様子が読み取れる。このようにクラスの中

に早い段階で「協調的な情緒的雰囲気」作りを教師が仕組み、学生が自ら行った活動を通してそれを実感できるようにすることは、科目の目標達成を図るうえで重要である。

「名刺交換会」での一方の留学生はどうであったろうか。学生の感想を再考察する。

留学生の感想： 「相手の笑顔を見た時、私は緊張しませんでした。皆が優しいと思っています。… 今度の名刺交換会私たちの深い交流の良い基礎を置きました。そして、以後話すとき、共同の話題が多くなります。」

名刺を交換し合ったクラスの学生が笑顔で優しく接してくれたことから、固くならず楽しく活動に参加している様子を読み取れる。後半部分からはこの留学生が今後に期待し、クラスの学生との良い人間関係を発展させようとする意欲が生じているのが分かる。

D.W.ジョンソン他(2001)はグループの中で互恵的な相互依存関係を作ると、互いに目標に達成するための努力を励まし合い、自分の達成のみならずグループ全員の達成を図ろうとすると指摘している。彼等は促進的相互交流を「グループの目標達成のために、課題の達成や完遂に向けた取り組みを励まし促し合う人々が生み出す相互作用 (p.45)」と定義し、これこそが達成努力や互いを思いやり関わり合う人間関係に最も大きな影響を与えるものであるとしている。彼等の言う「対面的で促進的な相互交流」が5月26日実施のロールプレイの発表後の感想の中に読み取れる。

日本人学生の感想： 「特に留学生とはあまり話したり関わりを持ったことがなかったので、たくさんの会話やコミュニケーションがとれてよかった。まだ慣れていないせいか、日本語での発音がおかしかったり、言葉の意味が分からなくて困っていたら、積極的に教えてあげたいと思う。」

グループの中で留学生とコミュニケーションを取りつつロールプレイを仕上げて行く中で、この学生が留学生の日本語の発音矯正や意味理解の点で支援の手を差し伸べ課題の達成に向かって行こうとしていたのが分かる。また、次の留学生の感想からはグループ内での促進的相互交流がよく読み取れる。

留学生の感想： 「よく話し合った結果、私は店長で、Aさん(日本人)はアンナで、Bくん(日本人)は同僚の役割を演じることを決めた。ト書きも素早く完成した。次に私たちはまじめに練習を始めた。私は外国人で店長の役目をしたことがないので、どうすれば店長らしく演じられるかを彼らに尋ねた。「店長だから偉そうにした方がいい」と親切に教えてくれた。数回練習した後で私は「アンナさんは恥ずかしそうに同僚にプレゼントをあげるのだから、もう少し恥ずかしそうに、ゆっくり話した方がいい」という意見を出した。自分のグループがうまく演じられるために厳しい注文をつけたので、「厳しい監督」と言われた。」

この留学生は自分の役割の演じ方を日本人学生に尋ねるばかりではなく、グループの他のメンバーから「厳しい監督」と言われる位まで自分の意見をぶつけながら、ロールプレイ

活動の達成のために相互交流を行っていたのである。

このようなグループ内での促進的な相互交流は活発なコミュニケーション活動そのものである。アンケートの中で「あまり意義深くない」との回答が2割を少し超えるものに、「議論する4人組」、「スタジオパーク視聴分析」、そして「群読を楽しむ」の3つがあった。「群読を楽しむ」を除けばグループでの達成を求めると言うよりも個人の意見を中心にしての活動であった点に注意しておきたい。そして、「とても意義深い」と「意義深い」を足して95%以上の活動は「要約文を書く」を除くと、すべてがペアかグループでの促進的な相互交流を必要とするものであった。互恵的な相互依存関係のもとに促進的相互交流をグループ内で図れるようにその仕掛けを工夫し、提供することが教室内に活発なコミュニケーションを生み、学生達の日本語コミュニケーション力育成に繋がるものなのである。

引用文献

中学校学習指導要領「国語」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/002.htm 2006年9月6日ダウンロード。

D.W. ジョンソン/R.T. ジョンソン/K.A. スミス著、関田一彦監訳（2001）『学生参加型の大学授業－協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部。

エリザベス・キャリスター他著、ERIC 国際理解教育・資料情報センター訳（1994）『わたし、あなた、そしてみんな 人間形成のためのグループ活動ハンドブック』国際理解教育・資料情報センター出版部。

家本芳郎「教育実践ノート」3章群読 <http://iemoto.cside.com/no-0684.htm> 2006年7月4日ダウンロード。

高等学校学習指導要領「国語」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122603/002.htm 2006年9月6日ダウンロード。

松本茂編著（1999）『生徒を変えるコミュニケーション活動』教育出版。

文部省（1999）『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説―外国語編―』東京書籍。

文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』開隆堂出版。

奈良雅之他（1998）「大学教養教育における基礎・教養・言語表現等演習に関する検討―科目名と内容を中心に―」、『大学教育学会誌』第20巻第2号（通巻第38号）、pp.141-146。

日本コミュニケーション学会第36回年次大会発表要旨

http://www.caj1971.com/convention_2006/abstract.pdf 2006年7月5日ダウンロード。

日本放送協会・日本放送出版協会編（2006）『新にほんごでくらそう4・5』日本放送出版協会。

小学校学習指導要領「国語」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122601/002.htm 2006年9月6日ダウンロード。

東海高等教育研究所 (1997) 「大学生に日本語を教える授業が広がっている—日本語表現法科目の効果的な実施のために—」 筒井洋一.

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/tsutsui/thesis/hyogen/hyogen.html> 2006年8月9日ダウンロード.

上村和美・内田充美 (2005) 『プラクティカル・プレゼンテーション』 くろしお出版.

吉井町立中央中学校「学力向上フロンティア事業を支える活動」

<http://www.gsn.ed.jp/gakko/syo/yoschuoe/peer.htm> 2006年8月10日ダウンロード.

資料1 インタビュー活動記録用紙 (教師用)

コミュニケーション基礎 2006前期 「この先生にインタビュー！」記録用紙

グループ 学生氏名								
教員氏名 (了解有 無)								
インタ ビュー・ シート								
写真								
発表アウ トライン								
発表・評 価								
備考								

資料2 口頭報告評価シート

【インタビューの口頭報告 評価シート】

日付： / 学籍番号： 氏名：

_____ グループの口頭報告について

【次の記号を用いて、各項目を評価しなさい。】

◎大変良い ○良い △ふつう ×もう少し努力が必要

評価項目	内 容	評 価
アイコンタクト	聴衆を偏りなく見ていた	
表情	フレンドリーな表情だった	
姿勢	よい姿勢だった	
声（その1）	大きさが適切だった	
声（その2）	リラックスして、自信のある声だった	
速さ	速すぎたり遅すぎたりせず、スムーズだった	
発音	聞き取りやすい発音だった	

● このグループの口頭報告で気付いたことを2～3文で書きなさい。

資料3 発表原稿の一例（一部削除）

これから～先生へのインタビュー内容を紹介します。～先生は～年生まれ、～県出身です。～年に～大学の教育学士の資格を取得し、先生となりました。産業大学に入ったのは、私たちと同じで今年からだそうです。それまでは、教育委員会や～高校に勤めていました。大学での専門分野は情報教育、技術教育、教育工学で1年生と3年生を主に教えています。～先生の授業では、先生が作成したプリントを使用します。これには毎回時間をかけているそうです。でも今年頑張ってこのプリントを作成するには理由があり、今年作ってしまえば来年から楽ができるからだそうです。そんな楽天的な～先生の目標は、全員授業皆勤出席だそうです。よって、～先生の授業を履修している学生は、必ず出席するようにしてあげてください。

私たちは今学生生活を送っていて、人それぞれ様々な悩みがありますが、「～先生にも学生時代に悩みがあったのですか？」と聞いてみると、～先生は理系なのに英語が苦手だったそうです。スピーキングはそこそこに得意だったようで、留学生を家に泊めたり、一緒に遊んだりしていたそうです。英語全般苦手な私には絶対無理な話で、先生を尊敬しました。

～先生は今も悩みがあるそうで、それは娘さんの進路についてです。長女で初めての大学受験だから、何を準備していいのかわからないとおっしゃっていました。父親として、娘を県外に出したくない。でも生活力をつけるには県外に出すのが手っ取り早いと、すごく迷っていたようでした。～先生の授業を初めて受けた時から優しそうな人だなと感じていましたが、インタビュー中も、ずっと笑顔で私たちの質問に丁寧に答えてくれる良き先生であり、子供のことを大切にする良き父親ということが分かりました。以上で～先生へのインタビューの報告を終わります。

資料4 アンケート

【コミュニケーション基礎2006 アンケート】実施日： 月 日

◎基礎情報の当てはまる方を選んで下さい。留学生は必要事項を記入して下さい。

男・女 日本人・留学生 (滞在年数 年： 日本語能力試験 級)

I コミュニケーション基礎で行った次の各活動が意義深いものであったかどうかを評価して下さい。「グループ活動」とあるものは、グループ活動として意義深いものであったかを評価して下さい。また、各活動への簡潔なコメントを一言書いてください。

1 名刺交換会

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない
コメント： _____

2 他者紹介

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない
コメント： _____

3 私の名前の意味 (を伝える)

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない
コメント： _____

4 日本一長い名前 (寿限無)

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない
コメント： _____

5 ロールプレイ (対話を演じる) 「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない
コメント： _____

6 議論する4人組 (「大学生はアルバイトをするべき」) 「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない
コメント： _____

7 インタビュー

7-1. 「スタジオパークからこんにちは」を視聴しての分析

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

*7-2～7-5の項目は「この先生にインタビュー！」についてです。

7-2. インタビュー・シート作り「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

7.3 先生とのインタビューそのもの「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

7.4 口頭報告アウトラインの作成「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

7.5 口頭報告「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

8 群読を楽しむ「グループ活動」

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

9 要約文を書く

とても意義深い 意義深い あまり意義深くない 意義深くない

コメント： _____

II グループ活動についての次の各項目に答えて下さい。

1 グループ活動を通して、自分に自信がついてきたと感じますか。

強く感じる 感じる あまり感じない 感じない

2 グループ活動を通して、相手を思いやる気持ちが育っていると感じますか。

強く感じる 感じる あまり感じない 感じない

3 グループ活動を通して、他者に貢献できていると感じましたか。

強く感じる 感じる あまり感じない 感じない

4 あなたが最も楽しむことのできたグループ活動は何ですか。一つ選んで下さい。その理由も簡潔に書いてください。

ロールプレイ、議論する4人組、インタビュー・シート作り、先生とのインタビューそのもの、口頭報告アウトラインの作成、口頭報告、群読を楽しむ

理由： _____

III あなたはこの授業での活動を通して、自分の日本語でのコミュニケーション力が育まれてきていると感じますか。その理由も簡潔に書いてください。

強く感じる 感じる あまり感じない 感じない

理由： _____

IV ここでは留学生だけに尋ねます。

- 1 あなたの日本語力は、この授業を受ける上で十分であると思いますか。
強くそう思う　　そう思う　　あまりそう思わない　　そう思わない
- 2 この授業での活動を通して、自分の日本語力が高まったと思いますか。
強くそう思う　　そう思う　　あまりそう思わない　　そう思わない
- 3 2で「強くそう思う・そう思う」と答えた留学生だけに尋ねます。特にどういう日本語力が高まりましたか。(一つだけ選ぶか、記入する)
聞く力、話す力、読む力、書く力、まとめる力、発表する力、
その他()

V この授業での活動を通じて、コミュニケーション基礎履修者の中に友人ができましたか。(「できた」と答えた人は、日本人、留学生、両方の中からひとつ選ぶ)
できた(日本人・留学生・両方)　　特にはできなかった

VI 総合してこの授業で学んだことは、今後の学生生活ひいてはあなたの人生でのコミュニケーション場面で役に立っていくと思いますか。
強くそう思う　　そう思う　　あまりそう思わない　　そう思わない

VII 授業を改善する上で、こうしたら良いと思うことがあれば書いてください。
